経済倫理学序説

西部 邁

経済倫理学序説

西部　邁

中央公論社

経済倫理学序説　　定価1000円
昭和58年3月1日印刷　昭和58年3月10日発行　検印廃止　©1983
著者　西部　邁　発行者　高梨　茂　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2-8-7　振替東京2-34

目次

プロローグ——経済学への懐疑 ……3
ケインズ墓碑銘——倫理の問題をめぐって ……27
序 ケインズ殺し 29
一 道 徳 39
二 自 由 51
三 方 法 67
結 ケインズ葬送 83

ヴェブレン黙示録――懐疑の問題をめぐって……93
序　ヴェブレン伝説　95
一　人　生　102
二　視　点　125
三　構　想　143
結　ヴェブレン表象　162
エピローグ――大衆への懐疑……169

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

経済倫理学序説

プロローグ——経済学への懐疑

言論の平衡喪失

経済学とは、それを第一義においてみると、経国済民の術ということである。つまり国を〝おさめ〟民を〝すくう〟ための工夫である。西洋にあってエコノミーというのも、大略、これと同義である。オイコス＝ノモスつまり家政の法が、国民国家の形成につれて国政に適用され、ポリティカル・エコノミーとなったわけである。

自分の職種がこのように定義されていることにたいし、私は小さくない気恥しさをおぼえたままでいる。まず、そんな術を編み出すにふさわしい才覚が自分のうちにあるとは思えないし、仮に少々の思いつきがひらめいたとしても、それらを実行の次元でまっとうするだけの勇気と責任感が私には欠けている。むしろ自分の怯懦と無責任を知ればこそ、学職という虚業に就いているというのが私の場合である。これはてれでもてらいでもなく、致し方なくつきまとう条件を確認してみたにすぎない。

スコラの思弁哲学にさからってサイエンスの実践哲学をとなえたデカルトの意義についてわからぬではない。アメリカにおける産業社会の発展がプラグマティズムの哲学をうみだした必然も理解できる。またその哲学がわが国に伝統的な実学の風とあいまって、さしあたり、わが国民におびただしい幸福をはこんでくれているらしいことも承知している。実に、冠たるものは有用性の哲学なのであり、経済学はその第一級の侍女となることによって社会科学の女王たりえてきたのである。

だが経国済民とは、いかにも慢心せる物言いにきこえる。修身斉家すらいっこうにままならぬものたちが、どんな次第の逆転があって、治国平天下をいえるのであるか。国といい民といい、経済学ひとりによってはどう解釈しようもない複雑さのなかに、そして不確実さのなかに、生きている。このことを無視できるのは、ブルクハルトの口真似でいえば、「すべてを単純化するあのおそろしい人たち」である。単純化の助けをかりて、経済学をふくむほとんど一切の科学が国民にむかって、さらには人類にむかって、語りかける。それが慢心せる行為と私には思える。「人類にむけて話すという習慣は、最も崇高なものであり、それゆえ最も唾棄すべきデマゴギーの形式なのであるが、それは一七五〇年ごろに道を踏みはずした知識人たちによって採用された。自分自身の限界に気づかなかったこれらの知識人たちは、その職務からして話す人……であるにもかかわらず、言葉にたいする畏怖とか顧慮なしにそれを使用し、言葉がきわめて微妙な営みのための秘跡であることに思いが至らなかった」（オルテガ）のである。経済学は、こうした啓蒙主

義の知識人集団が歩いた二世紀間にわたる轍のなかに、すっぽりとはまっている。

この行程の果てに経済学が現在たどりついている状態を、私は〝言語障害〟とよんだことがある。そしてこの症状は、よりひろく、社会にかんする言論一般におよんでいるとも考えている。ある人々は多言症となり他の人々は失語症となるという違いはみられるものの、いずれにせよ、言葉にたいする畏怖・顧慮をないがしろにしてきたあげく、言葉における平衡が失われつつある。平衡をあえて崩すことによってもたらされる力動感あふれる破格の美というものもあるにはある。しかし、それが惰性となりきってしまえば、ダイナミズムというよりもオートマティズムである。つまり精神病理学でいうところの自動症である。自己制御されることのない表現が機械的に反復されるということである。そこにあって力動的なのはよりどぎつく表現することだけだ、といってそう言過ぎではない。

自分がその病理から免れているというのではない。こんな言論状況にあっては、真面目ぶっていうのでも戯れでいうのでもないのだが、たいがいの人間は健全どころの話ではないのだ。状況がどうかしているのなら、その状況に場所づけられている自分の方もどうかしているにちがいないのである。しかも、自分の不完全さを知ったからとて、ヒュームらの保守的懐疑のように、歴史の試練をくぐりぬけてきた伝統や慣習を頼りにするというわけにはいかない。というのも、歴史において勝ち残っていま手元にあるのは、政治的翼の左・右・中立をとわず、進歩主義のイデオロギーだからである。それは伝統や慣習を破壊するのに頓着しない。いわば、伝統を破壊する

伝統、それが進歩主義の文化だといえる。そしてこの奇妙な文化の鎖に知識人がつながれている。〝驚きに見開かれた眼〟が知識人の特質なのだとすれば、進歩主義にからめられて飛び立つこともできずにいるミネルヴァの梟、それが自分の姿なのだということについて、もっと驚いてよいのではないか。

こうした知識人の現状は、おそらく、進歩主義のもつ〝真面目さ〟のひとつの帰結なのである。進歩主義の態度には遊びの要素が少ない。遊びとは、厳格なルールに従い、非日常的な形で、緊張とそれからの解放とを味わうことである。遊びの反対を真面目とよぶなら、「今日まで、ある世紀が自己自身を、また存在のすべてを、ものものしい真面目さで受けとったことがあったとすれば、それはこの十九世紀にほかならなかった」(ホイジンガ)のである。そして進歩がその世紀の主題であり、経済がその主役なのであった。経済における進歩が経国済民の中心であるとする真面目すぎるイデオロギーは、今世紀をも強く呪縛しつづけている。

その結果はといえば、「人々は、世界を彼ら自身の日常平俗の型にはめこんで聖化するという運命をおびた存在になってしまい、また事実、そんなことをするのにふさわしい存在になってしまった」(同)ということである。スコレー(余暇、学校)あるいはルードゥス(遊び、学校)の人であるはずの知識人もまた日常性の聖化という仕事に、つまり進歩主義にたいする弁護論に、真面目に励んでいる。言論はかつては真剣な遊びであり、非日常性の領域において演じられる厳格な競技であった。それが今では、肥大した日常性の領域にますます組込まれていっている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

遊びが徳であるのか悪徳であるのか、真面目であることが善なのか悪なのか、それについてはここでは議論しない。ある人は遊びを人間に本来的な狂気の沙汰とみるかもしれないし、他の人はそれを麗わしい人間性の発露というかもしれない。いずれにせよ、言論の質が保たれるべきだとするなら、非日常性において遊ぶという精神が必要である。そして遊びの善悪について考えるのが、おそらくは、もっとも高度な遊びなのであろう。十九世紀のブルジョワにはそうした精神が稀薄であった。その意味で、経済学はブルジョワ精神の表象であった。また、ブルジョワ精神が大衆的に拡散したのが二十世紀であり、その成果が高度産業社会ということなのである。

よく知られているように、ローマ人は〝パンとサーカス〟の両方を必需とした。ここでのつながりでいえば、パンは日常的の真面目な仕事にかかわり、サーカスは非日常的の真剣な遊びにつらなる。パンなしにサーカスを享受することはできないし、サーカスなしにパンの製造に精出すこともできない。これが人間の是非もない条件のように見える。だが、パンとサーカスという対比は両断論理にすぎる。両者のあいだの相互浸透が見過しにされている。現在において日常的なものは、過去において非日常的であったもののいわば沈澱物である。喩えていえば、飛行機は翼ある蛇という空想の産物であり、スカイ・スクレイパーはタワー・オブ・バベルという野望の産物だということである。逆に、現在において非日常的なものも、そこに何ほどかの秩序があるからには、過去の日常性をひきずっている。あれこれの芸能が退屈な余暇消費の手段と化しているのがその分かりやすい例である。

現下の大衆化状況というのは、あっさりいえば、真面目な日常の仕事がなしくずしに懶惰な遊びに傾き、真剣な非日常の遊びがじょじょに風俗的な仕事に近づいているという、パンとサーカスの融解現象のことだと思われる。このような現象はいつの世にあっても避けることのできないものであろうが、その規模の大きさにおいて、しかもそれが進歩とみなされているという点において、今世紀は高度大衆社会とよばれるべき独特の性格をもっているのである。

社会科学の主要な役割は、この融解の様相を解き明かすところにあると私は思う。自然科学的の知が、技術学に結実することをつうじて、真面目な仕事（パン）に寄与しようとするのにたいし、そして文芸・人文的の知が修辞や物語を駆使することによって、真剣な遊び（サーカス）に貢献しようとするのにたいし、社会科学的の知は両者を架橋しようと努める。つまりそれは、技術と芸術という二種のアートを媒介する知の様式である。この媒介がうまくゆかないと、技術と芸術もそれら自身の径路をひた走って、いずれ、自動症に堕するほかない。

とうぜん予想されるように、媒介者としての社会科学は二面的な表現法を採る。文芸・人文知にたいしてはミュートス（物語性）の肢を、自然科学知にたいしてはロゴス（論理性）の肢をのばしてそれぞれを理解しようとする。しかしこれは社会科学の第一次の作業にすぎない。先にのべた融解現象のせいで、自然科学知のなかにはすでにミュートスがふくまれている。たとえば、技術的知識の体系は技術信仰という現代の神話によって支えられている。同じように、文芸・人文知にもロゴスがふくまれている。たとえば、芸術的表現の世界も市場的計算という現代の論理

のうえになりたっている。社会科学の第二次の作業は、そしてこれがより重要なのだが、ロゴスとみえてくるものの根底にミュートスを探り、そしてミュートスとみえてくるものの背後にロゴスを発見することだといえよう。

このミュートスとロゴス、つまり物語と論理の相互乗入れこそオルテガのいう物語的理性ということなのであろう。社会科学は科学的理性に依存するのでもないし文学的感性に頼るのでもない。むしろ両者の絶妙な混合あるいは化合をめざして、自分に独自の文体を煉るのである。これが緊張をはらんだ作業でないはずはない。社会科学がはたしてサイエンスになりうるか、それともエッセイにすぎないのか、などという二者択一の議論は、この緊張に堪えられないことの証左であろう。

ロゴスとミュートスあるいはパンとサーカスのあいだの危うい平衡が失われるとき、社会科学は言語障害に見舞われる。私の関係している経済学は、とくに私の属している世代において、見事にその渦中にいる。変な言い方かもしれないが、私が経済学をきらいになれぬ最大の理由は、それが素朴かつ赤裸なかたちで表現の障害をおこし、かくすることによって、社会科学における表現の本質を垣間見させてくれているという点にある。

わが国におけるここ二十年の経済学を鳥瞰してみたとき、最初の十年は理論派が、次の十年は実務派が、それぞれ相手を無視ないし軽蔑しつつ論陣をはってきたといってよいだろう。理論派は、公理から命題を導き、そして命題を検証するという科学の手続きにおいて、数理的および統

計的思考を充満させた。それはとことんロゴスの営みだったのであって、数式と数量によって表わすことのできない経済的経験のミュートスはいわば誤差項として処理されてしまった。他方、オイル・ショック以降にわかに台頭してきた実務派は、現場情報に密着しながら、叙述的思考を前面に押し出している。彼らは経済的経験にかんする叙事風の語り部なのであり、ロゴスの繋がりはファクトの脈絡によって屈服させられている。そこでは事実が至高のミュートス（神話）に祭り上げられている気配である。

理論派のやり方を観念主義とよび、実務派のそれを事実主義とよぶことが許されるであろう。むろん、どんな表現も独創性をめざすのであり、そして独創は偏倚をともなうのが普通ではある。しかし経済学における表現法の変化には、なにか不穏当なものが感ぜられる。第一に、それは余りにも不連続な変化である。二種の表現法のあいだには、互いを峻拒する態度ばかりが目立っており、みのりある批判も交話もおこなわれていない。観念から事実へと言論の支点がとびはねたのは、時代の気分のうつりかわりに歩調を合せたにすぎぬようにみえる。第二に、それは余りにも常套的な変化である。つまり、観念を重んじる抽象から事実を重んじる具象への転換、そしてまたその再転換というのは、今までに幾度も生じたおなじみのパターンである。たとえば芸術運動において、浪漫主義から自然主義へ、自然主義から象徴主義というふうに転換がくりかえされた。こうしたパターンにまったく無反省にのっているところに、経済学をめぐる現在の言論の異様さがある。またその異様さは、大衆社会の全体状況の異様さを、しごく素直に代表しているの

ではないか。

オルテガは大衆のことを〝甘やかされたお坊っちゃん〟とよび、大衆文化のしめす様々の症候をホイジンガは〝小児病〟と名づけた。そして知識人の言論がお坊っちゃんの小児病の典型となりつつあるのではないかと、彼らは懸念したのである。なるほど知識人は、一般に、そのぬぐいがたい虚業さのゆえに、甘やかされた小児にみえがちである。しかし、「遊んでいる子供はけっして子供っぽくはない。子供っぽくなるのは、遊びが子供を退屈させたときとか、どうやって遊んだらよいのかわからなくなったときに、初めてそうなる」（ホイジンガ）のである。言論が真剣な遊びであることをやめたとき、言論の小児病が言語障害の形をとってやってきたのである。

言語障害についてはヤコブソンの有名な類型化がある。いささか驚くのは、経済学の表現法における観念主義と事実主義が、じっさい完膚ないまでに、ヤコブソンの挙げた言語障害の二類型にあてはまるということである。だが、これについては他所で少し詳しく言及したことがあるので、ここでは要点をかいつまむだけにする。

彼が連結性障害とよぶのは、語の連結に支障をきたし、その代りに、語の選択だけに頼るような障害のことである。この障害にあっては、核となる主題的な単語を選びとるについては鋭敏であるが、構文が貧弱になるので、レディ・メイドのステレオタイプ化された表現が多くなる。また一般に、語（さらには文、イメージ）にかんする選択能力はメタファ（隠喩）を志向する。したがって、この種の障害者は隠喩を頻用する。けっきょく、決り文句で一切合財を隠喩するのが

連結性障害の特徴といえよう。誇張をおそれずにいうと、効用と競争と均衡というジャーゴン（専門語）からなる既成の市場模型で経済的現実のすべてを、そしてついには社会のすべてを、隠喩せんばかりであった理論派のやり方は、この障害にひどく似かよっている。観念主義は当初は斬新な表現法であったのだが、それが自動症のように繰り返されると、表現障害に陥るということである。

他方、ヤコブソンが類似性障害とよぶのは、類似した語のあいだの選択が困難になって、それを補うべく語の連結を多用するような障害のことである。この障害においては文脈が大事とされるのだが、文脈は必ずや事実を志向する。というのも事実とは、ことさらの解釈を要しないと思い込まれているような、固定した意味の脈絡のことにほかならないからである。また一般に、語（さらには文、イメージ）にかんする連結能力はメトニミー（換喩）をめざす。したがって、部分によって全体を換喩するのがこの障害の特徴である。逆にいうと、科学語や象徴語のような隠喩に属するものは排除される。ふたたび誇張を覚悟でいうと、理論への侮蔑をあらわにしながら、あれこれの顕著な事実を拾いあげて日本全体を、そしてついには世界全体を換喩してゆく勢いにある実務派の表現法は、この類似性障害にいちじるしく親近している。事実主義もはじめは説得力ある表現法だったのだが、事実に淫するようになると、そのうちいっそう刺激的な事実を求めてスキャンダリズムに走ることになろう。すでにその徴候がひろがっているように見受けられる。

私たちの時代は平衡感覚をすっかり失ってしまったのだ。少なくとも、そうかも知れぬと懐疑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com